

福島県立(旧制)安積中学校出身者のための東京学生寮

学生用寄宿舍「東京桑野寮」についての調査報告

平成29年(2017年)11月23日

東京桑野会 広報部会 芳賀雅美

調査期間 : 平成29年(2017年)11月1日～11月23日

調査方法 : 1) 文献調査

安積歴史博物館
東京都新宿区中央図書館
東京都新宿区戸山図書館
東京都中野区中央図書館
国立国会図書館データベース検索
朝日新聞デジタルデータベース検索
国土地理院地図検索 航空写真データベース
Yahoo地図検索
Google地図検索

2) 現地調査

新宿区西早稲田1丁目早稲田大学キャンパス
新宿区高田馬場4丁目25番付近
中野区新井5丁目13番付近

概要説明

1. 福島県立安積中学校五十年史より
桑野寮設立経緯と、当時の所在地が記述
2. 安中・安高百年史より
東京桑野寮の変遷をより詳細に記述
3. 現地調査と現在の地図比較
大正12年～昭和7年の9年間 …高田馬場
昭和7年～昭和20年の13年間…新井薬師
4. 航空写真での検証
現在と、昭和22年(戦後)、昭和11年の比較
5. 開寮の地「戸塚原」は地番が不明
大正期、昭和初期の地名から推定
大正12年測量区分地図
早稲田大学キャンパス鳥瞰図(昭和7年)

東京桑野寮の設置場所特定について

東京桑野会 広報部会

1. 福島県立安積中学校五十年史（昭和9年3月31日発行）

同十年十月十七日、本校出身東京遊學生の合宿所として、市外戸塚町（戸塚原一丁許の處）に桑野寮が生れた。其の産婆役として専心助力したものは、本校の先輩箭内互博士を始めとして、七海兵吉、濱田四郎、南大曹博士等で、それに寺田四郎博士、服部喜一郎、中島幹雄、今井精三郎、瀬谷浩、志賀梯輔、遠藤康彦、遠藤将三、鈴木芳貫、渡邊得之助、新田彌三郎、阿部源一、柏木悟郎等が後援した。さうして寮生活を希望するものが多いので、明十二年五月、擴張の必要を生じ、市外戸塚町伊勢原八三八に移轉した。

昭和七年七月二十八日、安積中學校後援會に於て金四千圓を授じ、東京市中野區藥師町二五五番地家屋貳棟（母屋は二階建、他に離れ平家一棟）を購入して、同年九月移轉した。

桑野寮開設

159～160頁の掲載記事
『桑野寮開設』7行記載

大正10年10月17日 誕生
戸塚町（戸塚原一丁許の所）
箭内互（6期）らが尽力し開寮

↓
大正12年5月 移転
戸塚町伊勢原838番地

↓
昭和7年7月28日 家屋購入
後援會が四千圓を投じた
中野區藥師町255番地
家屋2棟＝母屋は2階建、離れ平屋
同年9月に転居

現在の地番

戸塚原一丁（戸山ヶ原一丁目か？）
詳細不明であるが、西早稻田1丁目・
戸塚町1丁目の大隈會館のあたりか
地番不記載のため、特定できない

↓
戸塚町伊勢原838番地
新宿區高田馬場4丁目25番あたり
高田馬場公園の南西付近と推定

↓
中野區藥師町255番地
中野區新井5丁目13番あたり
新井藥師公園の東隣付近と推定

箭内互 のほかに功勞者として、
七海兵吉、濱田四郎、南大曹、
寺田四郎、服部喜一郎、中島幹雄、
今井精三郎、瀬谷浩、志賀梯輔、
遠藤康彦、遠藤将三、鈴木芳貫、
渡邊得之助、新田彌三郎、阿部源一、
柏木悟郎 の名がある

入寮希望者が増加し、次々と広い家屋を
求めて、移転していったと考えられる。

2. 安中・安高 百年史（昭和59年9月8日発行）

東京桑野寮誕生の経緯は、大正十一年十二月三〇日発行『校友会雑誌第五二巻』に「桑野寮の紹介」と題し、発起人の一人でもあった大方政一が詳しく報告している。まず寮設立の発端、目的について次のように書いている。

懐しい母校で鍛へられたスピリットを、どうかしてよりよく生かしたい希望や、現在の下宿業者の暴利、卒業生間の連絡、卒業生と母校との連絡、卒業生と在校生との連絡と、後輩諸君の東都に出られて一番悩まされる宿舎の問題等のため、我々はこの種の寄宿舎を熱望して居ました所が偶然十數名の同窓生の中に、此の話が持ち出されました。

こうして寮の実現に向けて活動が始められたのである。この時に寮設立に賛同し、尽力したのが東京帝國大学教授・文学博士箭内亘であった。箭内博士は寮の設立資金の調達のために、七海兵吉、濱田四郎、南大曹の諸氏を歴訪し、その快諾を得た。この箭内博士は寮設立後も寮生の相談相手となり力を尽くしてくれている。桑野寮最大の理解者・協力者であった。一方、学生の方も寮とする物件を物色し、郊外で、而も比較的通学にも便利な場所という事で、戸山ヶ原一丁目二階建て一戸を見つけた。こうして、大正一〇年（一九二一）十月十七日に一同が移り、その後二〇数年間続く事になった寮の第一日が始まったのである。この時移った最初の寮生は、大方政一、新田弥三郎、渡辺得之助、柏木悟郎、阿部源一の名でであった。また、寮の名称は、箭

内博士によって、母校所在地の名を取り、「桑野寮」と命名された。翌大正十一年（一九二二）秋の東京桑野会の席上で、堀田貢・鈴木利平・中澤彦吉・箭内亘・久米正雄・寺田四郎・南丈曹・濱田四郎・七海兵吉の九名の諸先輩が寮の相談役と決まった。この東京に誕生した桑野寮は、在京の大先輩にとって、若き日を思い起こす格好の場所となつたのであろう。大方政一はその模様を次のように記している。

大先輩諸氏も時々來寮せられて、諸氏自身桑野の少年時代にかへられた様な態度で一同と懐舊談に花を咲かせ、覺えず時を移されるを例とします。其他の先輩諸氏も、日曜毎に尋ねて來られて、愉快なりし桑野のエピソード次から次へと楽しく一日を送つて歸られます。第二の桑野は今や武蔵野の一角に芽ばえたのです。（『校友会雑誌第五二巻』）

こうして、桑野寮は在京同窓生の懐古の場となつただけでなく、母校と東京桑野会との連絡機関としての役割、また、上京した教師や上級学校を受験する学生の宿泊所的な役目も果たすようになっていったのである。入寮者のみならず、この寮に関係した同窓生にとって、郡山を遠く離れた東京での桑野寮の存在は、どんなに心強かつた事であらう。

である。また、日常の不平不満も、この寮誌に記入して、そのはげ口としたようである。これらの寮誌は昭和八年から昭和十六年までの一冊を残し、他は全て焼失してしまった。寮の運営費については、昭和五年（一九三〇）二月『校友會雜誌第五九卷』に掲載された徳田一郎の「東京桑野寮より」によると、寮の借料（当時七〇円）、賄婦の給料等もすべて含め、月末に当番会計が総支出を算出し、一人当たりの寮費を計算して請求することになっていた。従って寮費は常に一定せず、月によって変動した為、会計係は苦勞したようである。しかし、それにして一般の下宿生に比べれば、かなり安いものであった。

設立時に入居した家では約半年ほど過ごし、その後近くにある、部屋数の多い二階建の家に転居している。これも新たな入寮生によって、手狭になって来た為、大正十二年（一九二三）五月、戸塚町伊勢原に移転した。当時の寮員は八名で、それに賄婦の母子を含め合計一〇名であった。昭和七年（一九三二）七月二十八日から中野区新井葉師町に売りに出していた医院を見つけ、これを四千円で買ってそこに移り住むようになった。この時、購入資金の約半分、二千円は、母校創立四十周年同窓大会の際に設立された後援会の募金した中から出してもらい、残りの二千円は毎月四五円づつ返済し、約五年間でこれを完了した。この家屋購入の意図については記録がない為明らかではないのであるが、この時の寮生の決断と努力により、土地は借地ながら建物は寮の所有物となり、その後の寮生は大いに恩恵を被る事になった。寮の食事係は設立当初は「お末さん」と呼ばれた人物であったが二ヶ

月ほどで辞め、その後は郡山から呼び寄せた狩谷タツノ、その三、四年後には、長期間に渡って母親のように寮生の面倒を良く見てくれて、最後は寮と運命を共にした石塚トヨであった。寮生からは「トヨ婆さん」と呼ばれ、大変良く慕われた人物である。多くの寮生を身心共に育み、さまざまな思い出を寮生に残してくれたこの寮は、終戦の年の昭和二十年（一九四五）五月二十四日、午後一〇時からの米軍の大空襲によって焼け落ちてしまった。この時、逃げる途中の石塚トヨは焼夷弾の破片を受けて亡くなったのである。寮の焼失、石塚トヨの死亡と共に、大正十年以来二〇数年に渡って多くの同窓生が出入りしたユニークな自治寮は、ただ一冊の寮誌と多くの思い出を残して、その終焉を告げたのである。桑野寮で青春の一時期を過ごした同窓生は総数七五名であるが、間接的に寮の恩恵を受けた同窓生の数となると、その何倍にもなるであろう。戦後の混乱などで、借地権は失ってしまったが戦後装いも新たに再出発した同窓会報によると、昭和三十年発行の『会報第一号』には、桑野寮再建の気が高まって来たという記事が掲載され、更に昭和三十二年の『会報第三号』には、三十一年に東京桑野寮再建準備委員会が組織されたとある。しかし、その再建はならなかった。新井葉師寺に埋葬されていた石塚の遺骨は、昭和二十九年三月二十一日に安藤重春の墓地に移し、建碑して慰霊祭を行なった。そして、寮の焼失が五月二十五日早朝であったので、寮の最後と石塚トヨの命日をこの日に定め、毎年五月二十五日には寮友が集って、石塚トヨと寮友物語者の慰霊祭を行ない、合わせて往時をしのび旧交を

百年史における『東京桑野寮』の記述は多いので全文は割愛するが、五十年史の記載事項に加えていくつか新しいことが分かった。

- (1) 開寮の地は、戸山ヶ原一丁目。二階建て一戸を借用。
- (2) 開寮時の寮生は、大方政一（桑野寮代表＝寮長）、新田彌三郎、渡邊得之助、柏木悟郎、阿部源一の5名。
- (3) 寮の名称は、箭内互博士によって、母校所在地の名を取り、『桑野寮』と命名。箭内互（安積6期生）は、大正10年当時は東京帝国大学文学部東洋史学科助教授で、大正14年に教授となる。
- (4) 半年ほどで、近くの別棟を借り転居している。
- (5) 手狭になって大正12年5月に、戸塚町伊勢原へ移転となるが、当時の寮生は8名。賄い婦の母子2名と合わせ、10名が生活した。
- (6) 戸塚町伊勢原での建物賃借料は月70円（当時）。食費や賄い婦の給与も合わせて寮生の人数割りとした。
- (7) 昭和7年7月28日に、中野区新井薬師町の医院が売りに出されていたものを四千円で購入。土地は借地権で建物2棟を購入した。
- (8) 上記四千円のうち、半分の二千元を母校創立四十周年同窓大会の募金で賄い、残りの二千元を寮生が5年間かけて返済した。
- (9) 寮での賄い婦は、設立当初の初代が「お末さん」。2ヶ月ほどでやめ、二代目は郡山から呼び寄せた狩谷タツノさん、その3～4年後に長期間にわたって寮生の面倒を見てくれた石塚トヨさん。通称「トヨばあさん」。
- (10) 石塚トヨさんは、昭和20年5月24日午後10時ころから始まった米軍の爆撃により、翌日未明に寮が焼け落ちると運命を共にしてしまった。朝日新聞の記事によれば、寮生の津野喜三次（安積55期生）と手を取り合って戦火の中を逃げる途中、焼夷弾の破片を首に受け出血多量で早朝に死亡。近所の当時女子中学生だった佐伯芳枝さんが、目撃して1990年4月27日の朝刊に「戦時中の思い出」として投稿している。
- (11) 石塚トヨさんの遺骨は新井薬師（梅照院）に寮生によって埋葬されたが、昭和29年3月21日に元寮生の安藤重春（安積43期生）＝日本画家・安積幼稚園の園長・安積国造神社宮司＝が、郡山の安藤家墓地に移設。
- (12) 東京桑野寮で生活した寮生は、総計数75名。
- (13) 東京桑野寮再建の運動は戦後何度か活発になったが、実現しなかった。



東京桑野寮の前で寮生たち

ちょっとピンボケになってしまったが、新井薬師時代の寮写真。

2017年11月18日(土)に、現地写真を撮影した。

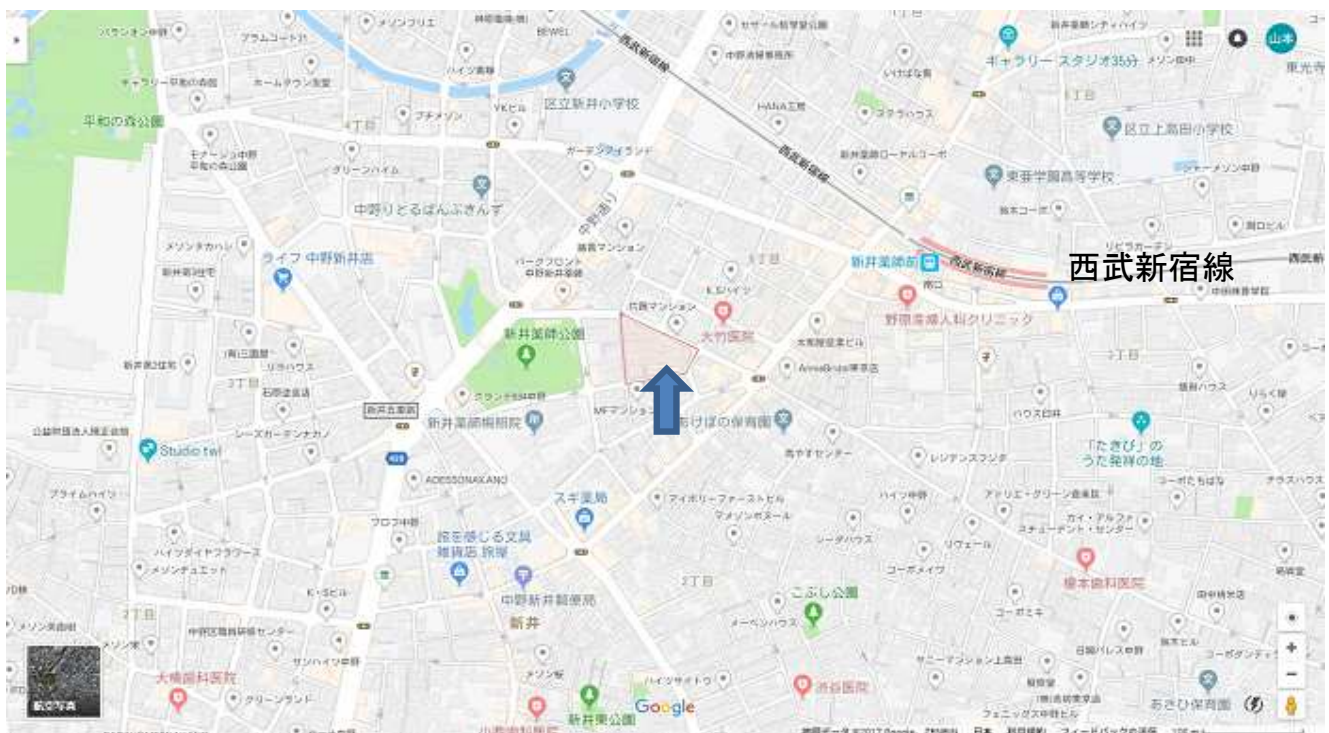
現地写真 (2017年11月18日土曜日 曇り時々小雨)

新宿区高田馬場4丁目25番あたり



JR高田馬場駅南の、諏訪通りガードをくぐって西に300mほど。右手北側である。

中野区新井5丁目13番あたり



西武新宿線の新井薬師前駅から、西南西500mほどの住宅街。
新井薬師公園の東隣付近。

東京桑野寮の開寮の地は、地番が不明で特定できなかった。
大正10年当時、東京府豊多摩郡戸塚町下戸塚と推定される。
後述の地図と早稲田大学の鳥瞰図を参照のこと。
今後新たな資料が発見され、下戸塚の地番が判明すれば特定できる。

新宿区高田馬場4丁目25番4号

2017年
現在



諏訪通ガード

1947(昭和22年)年3月戦後



諏訪通ガード

1936年(昭和11年)6月



諏訪通ガード

淀橋区戸塚町4丁目838番地

中野区新井5丁目13番2号



2017年
現在

新井薬師口
交差点

1947(昭和22年)年3月戦後



新井薬師口
交差点

1936年(昭和11年)11月



新井薬師口
交差点

中野区薬師町255番地

東京桑野寮 開寮の地 (推定)

東京府豊多摩郡戸塚町下戸塚 大正12年測量区分地図

安積中学五十年史には、『戸塚町(戸塚原一丁)』と記載

下図赤線内の、早稲田大学を中心とする東西550m、南北710m内と推定



早稲田大学 早稲田キャンパス鳥瞰図 昭和7年(1932年)の航空写真より



この写真（鳥瞰図）のどこかに、東京桑野寮の開寮の地が写っているかもしれない。
早稲田大学の歴史資料より転載した。

大正12年の測量区分地図や現在の国土地理院地形図と比較すると分かり易いかと思う。

編集・構成：東京桑野会 広報部会 会報編集委員会

以上